

令和7年度第2回

宮城県特別支援教育将来構想審議会

会 議 記 録

令和8年2月10日(火)

宮城県教育庁特別支援教育課

令和7年度第2回 宮城県特別支援教育将来構想審議会

日 時 令和8年2月10日（火）午後2時30分から午後4時まで

場 所 宮城県行政庁舎4階 特別会議室

出席者出席者（16名）

門脇 恵 委員 佐藤 勝 委員 松崎 和佳子 委員 野口 和人 委員
門脇 敏昭 委員 田中 晃 委員 千田 裕子 委員 伊藤 清市 委員
秋山 幸恵 委員 菅原 紀子 委員 高橋 美奈子 委員 西澤 由佳子 委員
永野 幸一 委員 猪又 明美 委員 黒田 賢一 委員 大西 孝志 委員

欠席者（4名）

今 公弥 委員 片岡 明恵 委員 本田 聖子 委員 庭野 賀津子 委員

宮城県教育委員会関係者

遠藤 秀樹（宮城県教育庁副教育長）

高橋 佳宏（教育企画室長）

工藤 駿（教職員課長）

本田 史郎（義務教育課長）

菊田 英孝（高校教育課長）

平塚 武信（施設整備課副参事兼総括課長補佐）

佐々木 範子（特別支援教育課長）

【司会（相澤）】 開会に先立ちまして、資料の確認をお願いします。次第、委員名簿、資料1、資料2、資料3、資料4、資料5、資料6となっております。それと報告が1つ、報告別紙、その他、参考資料となっております。

ただいまより「令和7年度第2回宮城県特別支援教育将来構想審議会」を開会いたします。初めに、宮城県教育庁副教育長、遠藤秀樹から挨拶を申し上げます。

【遠藤副教育長】 副教育長の遠藤でございます。

本日は、御多用にもかかわらず、令和7年度第2回特別支援教育将来構想審議会に御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。また、日頃から本県の特別支援教育の推進

につきまして、格別の御支援と御協力をいただいておりますこと、この場をお借りしまして心より感謝申し上げます。

さて、今年度は、第2期宮城県特別支援教育将来構想の実施初年度であり、本構想に掲げる、「自立と社会参加」、「誰一人取り残さない学校づくり」、「誰もが認め合う地域づくり」の3つの目標の実現に向けて、現在、さまざまな事業に取り組んでいるところでございます。

委員の皆様には、第2期将来構想の前期の実施計画に基づく取組状況について、昨年10月15日に、「学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業」のモデル校である岩出山高校を、同月28日には、狭隘化が課題となっている特別支援学校の在り方検討の一環として、角田支援学校の現場を視察いただきました。

御参加いただいた委員の皆様には貴重な御意見を頂戴したところですが、本日の議題であります「第2期宮城県特別支援教育将来構想実施計画（前期）の取組状況」におきまして、改めて御意見を伺いたいと存じます。

併せて、第2期特別支援教育将来構想実施計画（前期）における狭隘化対策の検討状況などについても御報告させていただきます。

本県の特別支援教育に関する取組を、さらに充実したものとするため、委員の皆様の忌憚のない御意見を頂戴できればと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【司会（相澤）】 次に、本日御出席の委員につきましては、お配りした委員名簿のとおりとなっております。なお、菅原委員はウェブで御参加いただいております。また、今委員、片岡委員、庭野委員、本田委員は、都合により御欠席の連絡をいただいております。

続きまして、県教育委員会の出席者を紹介いたします。宮城県教育庁副教育長 遠藤秀樹です。

【遠藤副教育長】 遠藤でございます。よろしくお願いいたします。

【司会（相澤）】 宮城県教育庁特別支援教育課長 佐々木範子です。

【佐々木課長】 佐々木です。どうぞよろしくお願いいたします。

【司会（相澤）】 その他の職員につきましては、お手元に配布の名簿に代えさせていただきます。次に、会議の成立について御報告申し上げます。本審議会は20名の委員で

構成されておりますが、本日 16 名の出席となっております。 よって、特別支援教育将来構想審議会条例第 4 条第 2 項の規定により過半数の委員の出席をいただきましたので、審議会は成立しておりますことを御報告申し上げます。

なお、本日の審議会は、「公開」により開催することとしますので、御了解願います。

次に、事務局からお願いがございます。 1 つ目は、委員の発言に関してでございます。 本日は、対面とウェブを併用して進めてまいります。 ウェブで出席されている菅原委員におかれましては、発言時以外はマイクをオフにいただき、発言を希望する際は挙手の上、会長から指名されましたらマイクをオンにいただきますようお願いいたします。 また、通信の不具合等が生じたときは、あらかじめお知らせした電話番号に御連絡いただきますようお願いいたします。

対面で出席されている委員におかれましては、職員がマイクをお持ちしますので、発言後は、マイクを職員へお戻しく下さい。 なお、発言の際にはあらかじめお名前を言っていただくようお願いいたします。 本日は要約筆記の方もいらっしゃいますので、御協力をお願いいたします。

それでは、議事に入ります。 ここからは、野口会長に議事進行をお願いしたいと存じます。 野口会長、よろしくをお願いいたします。

【野口会長】 皆さまこんにちは。 年が明けてもう 1 カ月以上経ちましたが、本年もどうぞよろしくお願いいたします。 それでは、議事を進めたいと思います。 皆様、円滑な議事の進行に御協力をお願いいたします。

本日は、今年度第 2 回目の審議会となります。 次第のとおり、本日は、「議事」1 件です。「第 2 期宮城県特別支援教育将来構想実施計画（前期）の取組状況について」審議を行ってまいります。 委員の皆さまにおかれましては、忌憚のない御意見をよろしくお願いいたします。

では、第 2 期宮城県特別支援教育将来構想実施計画（前期）の取組状況について、事務局から説明をお願いします。

【事務局（教育指導班・刈敷）】 宮城県教育庁特別支援教育課の刈敷と申します。 令和 4 年度からスタートしております、「学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業」について御説明申し上げます。

本事業は、事業1大学と県立高校が連携した「学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業」、事業2「発達障害理解基礎研修」（初級コース・中級コース）の2本柱で構成しております。

事業1については、令和4年から令和6年の3年間を松山高等学校、令和7年と令和8年の2年間は岩出山高校をモデル校に指定し、連携する早稲田大学教育・総合科学学術院教授、本田恵子先生の御指導のもと、アセスメントやUDL（学びのユニバーサルデザイン）を活用し、探究型学習や体験学習を通じて、生徒が主体的に学ぶ力を育む教育プログラムの実践に取り組みました。

事業2については毎年夏季休業期間に、県内の幼、小、中、高、特、全ての教職員を対象に、「発達障害理解基礎研修」（初級コース・中級コース）を実施しております。初級コースは3日間、中級コースは2日間講義と実践を交えた集中講座形式となっております。各コースそれぞれ持ち寄った事例の課題解決に向け、具体的な支援方法の検討から支援計画の作成まで実践的な内容で研修会を実施しました。

事業1で新たにモデル校に指定した岩出山高校の1年目のスケジュールと発達障害理解基礎研修会の概要になります。早稲田大学本田先生には、年間10回岩出山高校に来校していただき、アセスメントを実施し、その結果を基にソーシャルスキルの実践演習、UDLによる授業づくりを通じた学習環境づくりの御指導をいただきました。

岩出山高校に在籍する生徒が、自分の学びの特性を知り、主体的に学習に取り組めるよう、先生方向けに研修会を開催し、MIの活用やUDLの考え方に基づいた授業づくりに取り組んでいただきました。先生方にはこれまでのやり方とはまた違った考え方で授業づくりに取り組んでいただく中で、大変御苦勞をおかけしたと思いますが、これまでの取組を振り返っていただくとそれぞれに成果があったと思います。

4月から事業を引き受けていただきました岩出山高校の先生方の取組や意識の変化、授業づくりのために行った方法、生徒の学習意欲や学校生活における変化などについてはこの後報告いたします。

アセスメントについては、生徒本人に結果を丁寧に説明し、自分の強みや弱みを理解した後で、自分の強みに合わせた教材で実際に学習をしました。保護者からも子供の特性を知ることで今後の学習に期待する声も聞かれました。

SSTの実践演習を通して、運営に関わった3年生から相手に分かりやすく伝える力を高めるとともに、場面に応じた声かけの重要性を実感した。参加者の様子を観察し、困って

いる仲間気づいて支援するなど、周囲に目を配る力が育まれコミュニケーションに対する自己効力感が高まったなどの報告がありました。

先生方からは、生徒の様子や集団の動きに目を向けることでこれまで以上に生徒理解が深まり、一人ひとりに寄り添った関わりができるようになりました。言葉の選び方や距離感を意識しながら関わることで、良好な人間関係を形成し、これまで関わりの少なかった生徒にも自然に声をかけられるようになりました。また、指導の場面では、答えを与えるのではなく、生徒自身が考え、気づくことを促す対話的な関わりの重要性を理解し、主体的な学びを支援する姿勢を身につけることができたと言う報告がありました。

以上簡単ではございますが、本事業の説明とさせていただきます。

【事務局（補足）】 ただ今の説明は、資料2「第2期将来構想実施計画（前期）施策体系図」の目標2「誰一人取り残さない学校づくり」の「優先取組2 多様な教育的ニーズに対応した教育環境等の充実・整備」の中の赤枠の事業となります。

【野口会長】 ありがとうございます。

それでは、実地調査に参加された委員の皆様から、事前に御意見をいただいておりますが、改めて感想等をお願いします。なお、おひとり2分以内でお願いできればと思います。永野委員、千田委員、黒田委員、田中委員、秋山委員、菅原委員の順で発言をお願いします。

最初に永野委員からお願いいたします。

【永野委員】 岩出山高校の視察をさせていただきました。3年生の授業で、それぞれの関係がだぶできてきているような感じで、交流もできているように思いました。ポジティブシャワーという活動で、後ろ向きな発言を互いにグループで励ますように声がけをし、表情が明るくなり、コミュニケーションの取りやすい環境ができてきたなと思って見えていました。

その後、ロボットと目隠しというプログラムをやったのですが、目隠しはそれぞれ制限を加えた動き方で少し難しいのではないかと感じていたところ、さすが3年生で、結構こなして楽しんでやっておりました。

高校の先生方も参加してアドバイスをしており、先生方が今後実際にやるという時にもその経験が生かされるのかなと思いました。できれば早い段階から、1年生からやればよい

いのかなと思いましたので、今後その動きが広がっていくといいかなと思いました。以上です。

【千田委員】 千田でございます。私も岩出山高校の視察をいたしました。実践のところでは、グループの中に入れていただき、生徒たちとやり取りをさせていただきました。

最初に「自由にグループを組みましょう」と講師の先生が声かけをした時に、スムーズにグループが出来上がり、誰1人残る生徒がいないことにびっくりしましたが、後にお聞きすると、3年生で関係性ができているからスムーズにできているとのことでした。経験や実践を積み重ねることの有用性を実感しました。

ポジティブシャワーのグループに入れてもらったのですが、子供たちが相手のことを一生懸命考える素直な態度に心打たれました。発言できない生徒に「頑張れ」と自然に応援の言葉が入ったり、自分から友達の力を借りたりと、非常にスムーズに自然な形でコミュニケーションがなされていることに、優れた教育実践が子供たちに変化をもたらす可能性を感じました。

単発のイベントに終わらず長く続けていくことで、自然に人との関わり方を学んでいくのだと実感しました。課題は、これをどう広げていくか、定着させていくかだと思います。高校のみならず、小さい時からの積み重ねが非常に大事だと思いますので、小中学校の義務教育の方にも広げて定着させていく、違いを排除しない心を育てていくことを、特別支援教育課だけでなく高校教育課や義務教育課も巻き込んで、進めていただきたいと思ったところです。以上です。

【黒田委員】 黒田です。私も今のお二方の意見とほぼ変わらないのですが、松山高校で3年間終わって、今度岩出山高校で1年目ということで、松山高校で取り組んだ点を事前にもう少しその辺の説明が欲しかったなというのがあります。

先生方がこれまでのプログラムで大学の先生等から教えていただいて取り組んできた様子がもう少し分かれば、先生方の変化も見られたのかなと思います。今回は生徒の様子を中心としたフィールドワークでしたが、3年生ということで人間関係もできている中でしたので、午前中の1、2年生の様子も見られたら、学年による違いなども分かったのかなと思います。

来年度もぜひ継続して視察させていただければありがたいですし、違う学校に横展開できるよう、粘り強くやっていただきたいと思います。以上です。

【田中委員】 田中でございます。私も岩出山高校に参加させていただきました。高校生の様子を見て、こんなに明るく前向きに物事に取り組む子たちの様子を見ることができ、すごく嬉しかったです。どの子供たちも私には生き生きとして見えました。

3年間の人間関係の積み重ねが、こうしたプログラムの中で育まれてきたのだなと思いを新たにしました。また、先生方も大変生き生きしているように見えました。こういうことをすると子供たちがこんな風になるのだなという実感を先生方が持てたのだなと思って、とても嬉しかったです。

たまたま本校から異動した教員が岩出山高校におりまして、「支援学校と通常の学校の教育ってどう？」と聞いたところ、「先生が多くやる気をだしてくれているのがとてもやりやすいです。同じ方向を向いてくれているのがやりやすいです」といった話を聞きました。1つの学校だけでなく様々な学校に異動して勉強することはすごく価値あることだなと実感を持ってました。

課題はこの良い実践を横展開していくことですが、支援学校から通常の学校へ、通常の学校から支援学校への異動も可能でございますので、そういったところで多くの先生方が学び、子供たちに学びの機会が豊富に与えられるようになればいいなという思いを持ちました。大変感動したというのが一番の感想です。以上でございます。

【秋山委員】 秋山です。私も授業を見させていただいて、他の委員さんと重なる部分もあるのですが、まずポジティブシャワーのところで、自分の短所を他の皆さんの前で言えるということ自体がすごいなと感じました。それに対して周りの生徒さんが長所に言い換えて返すというのは、なかなか良い経験じゃないかなと思って見させていただきました。

目隠しのゲームのところでは、うまくできないお子さんを周りの生徒が見守り、応援し、できた時に一緒に喜ぶという様子を見させていただき、とても素晴らしい授業だなと思いました。

1、2年生の授業を通して積み重ねての今日の授業だということをお聞きしましたので、準備も大変だと思いますし、先生方も大変なんだろうなと思ったのですが、他の委員の皆さんと同じように、ぜひこの良い取組を面的に広げていただけたら、子供たちにとって良い環境になるのではないかなと思ったところでした。以上です。

【野口会長】 それでは、菅原委員はマイクをオンにして御発言をお願いします。

【菅原委員】 菅原です。聞こえますでしょうか。私の方から感想を述べさせていただきたいと思いますが、この事業ですが、岩出山高校で4月から始まって、私たちが視察に行った10月くらいまでの半年間で、生徒というよりは教職員の方がどのように変容したのかということにすごく興味を感じていました。研修を通じて様々な分析の仕方などを学んでいらっしやると聞きましたが、教員側にその意識が強く根付いているのを強く感じたところです。

生徒たちにとって授業におけるバリアは何なのかを考えるのも大事ですが、高校の現場に特別支援教育の視点を持ち込んで教員がマインドセットを合わせていくというのは本当に大変なことなのではないかと思っています。

学習が思うように進まない時に、教員の多くはどうしても生徒側に原因を求める傾向がある中で、このアプローチに関しては「問題は教員側の環境設定や教え方にある」と考えて進められている。これが広く横に伝わっていけば、高校における特別支援教育の在り方もだいぶ変わってくるのではないかと思います。生徒を見立てる力というのは本当に大切だけれども難しいので、それを学校全体で学べるというのは非常に大事だと思います。

今回視察で拝見したのはSSTの場面でした。できれば実際の授業の方を見せていただければ、なお生徒側の変容も分かったのではないかと思います。SSTの場面では、生徒たちが安心・安全な環境で活動できる設定をしてあげることがすごく大事になると思います。ただ、活動を拝見していると教職員の支援がまだ少し多いなと気になる場所もありました。これが回数を重ねるに従って、どんどん生徒が主体的に動けるようになるのではないかと期待をしております。以上です。

【野口会長】 貴重な御意見をたくさんいただいたと思います。

多様な学びを考えた時に、必要なサポートを誰でも受けることができるということが大前提ですが、学年が上がるとサポートを受けること自体をためらってしまうということも生じてきます。本当は小さい頃からそれが当たり前だという生活を送ってくるのが一番大事なことですが、そのためには周りの児童生徒が「いろんな学び方があって、応じたサポートを受けるのは当然なのだ」と理解していくことが必要だと思います。

今回のSSTに関しても、当該の児童生徒の社会的なスキルを高めていくというよりは、クラスワイド、スクールワイドで他の子供たちを含めた全体のソーシャルスキルを高めていく、多様性を認めていく形のものだと理解しました。インクルーシブ教育システムは、通常学級の中で誰もがサポートを受けられる形になっていなくてはなりません。

具体的な学習サポートに関しても、アセスメントに基づく見立てを行ってサポートしていく。K-ABCの継次処理・同時処理などの脳の処理の仕方に合わせて、それぞれに応じたやり方を生かしていくことにつながっていくものだと思います。

続いて、実地調査②「障害児地域教育充実事業」について、事務局から説明をお願いします。

【事務局（整備計画班・佐藤）】 それでは御説明申し上げます。資料5を御覧ください。こちらは10月28日、「障害児地域教育充実事業」について、5名の委員の皆様が角田支援学校を視察していただきました。

この事業は、資料2第2期将来構想（前期実施計画）の目標2「誰一人取り残さない学校づくり」の「優先取組2 多様な教育的ニーズに対応した教育環境等の充実・整備」の中の青枠の事業となります。

当日の視察概要ですが、まず角田支援学校から学校沿革、児童生徒の在籍状況、教育活動の内容等について御説明いただき、続いて県南地域の各学校（角田支援、同白石校、山元支援、船岡支援の4校）の状況説明として、特別支援教育課から各学校の在籍数、建物敷地の状況、配置関係等について説明いたしました。

その後、校舎内を巡回していただき、授業での児童生徒の様子や、狭隘な学習環境を含めた施設設備等の状況について視察・確認をしていただきました。

視察後には各委員から様々な御意見を頂戴し、特別支援学校の在り方の検討を進める中で県として参考にさせていただきました。詳しい内容については、後ほどの報告のほうでご説明させていただきたいと思います。

以上簡単ではございますが、実地調査②について御説明させていただきました。

【野口会長】 それでは、実地調査に参加された委員の皆様から、事前に御意見をいただいておりますが、改めて感想等をお願いします。なお、同様にお一人2分以内をお願いします。伊藤委員、大西委員、松崎委員、門脇恵委員、猪又委員の順に発言をお願いします。

それでは伊藤委員からお願いいたします。

【伊藤委員】 角田支援学校を視察させていただきました。資料6に感想を書かせていただきました。

1つは、今回「狭隘化」というテーマでしたが、それに加えて老朽化ですね。猛暑日が続いたり、寒さ厳しい中で子供たちがどういう形で勉強されているのだろうという心配がありました。

もう1つ、私自身の車椅子の立場から申しますと、今は医療的ケアの必要な生徒さんがお一人だということでしたが、今後多目的トイレ（バリアフリートイレ）が結構狭くて私自身も苦勞する形だったので、そういった生徒さんが増えたら一段と狭隘化が進むのではないかという懸念がありました。

また、10月下旬で熊の出没が毎日ニュースになっていた時で、近隣も柿の木などが多い環境でした。視察の段階では特に対策は決めていच्छらなかったので、動物被害や防犯に対してどう取り組んでいただくかは課題ではないかなと感じました。狭隘化も感じましたが、周辺環境も含めて少し心配だったところです。以上です。

【大西委員】 東北福祉大学の西と申します。10月末に見せていただきました。

特別支援学校の狭隘化は県だけの話ではなく全国的な状況です。特別支援教育の制度が始まってから20年弱になりますが、学校数が約200校増えています。

視察の様子の写真を見ると、教室の中に机がいっぱいあって、定員以上の子供さんが集まってやると、少ない人数だとトラブルが起きないようなことでもぶつかってしまったり落ち着けなくなったりということがあるので、ぜひ何とか考えてほしいというのが現状です。

全国的に見ると、高校の生徒数が減って空き教室があるということで、高校の中に特別支援学校の分校を作る学校が突然できるケースが増えています。狭い空間にたくさんの生徒がいる状態ですので、例えば同じ設置者の県立高校の空き教室などを使うと、スクールバスに乗っている時間などの通学時間を少しでも短縮できるということも考えられます。ぜひそういう情報も入れて視察などをしていただければと思います。以上です。

【松崎委員】 角田支援学校に行かせていただきました、松崎でございます。

狭隘化が課題ということで、車椅子のお子さんへの配慮や学年配置の構成等を考えると課題が多いと感じました。

しかしながら、子供たちの作品の展示や掲示物の工夫がされており、老朽化を感じさせない努力や、一人一人を大事にしている思いが伝わってきました。

教育活動の取組として大きく2つに感銘を受けました。1つ目は「丈夫な体作り」です。毎日励まし合いながら運動することで、間違いなく丈夫な体を作られると思いました。また、毎年高校駅伝に出場することで子供たちの大きな自信につながっていると感動いたしました。

2つ目は就労を目指した活動です。ハウスクリーニング、料理、物作りなどを通して、一生懸命働くことの喜びや大変さを学んでいるところに感心いたしました。

障害児教育充実の一環として学校運営協議会も立ち上げ、地域の協力を得ながら米作りを行っているなど地域理解も進んでおり、理想的な関係だと感じました。

将来の自立・社会参加に結びつくような、自分で考えて行動する取組を先生方が愛情を持って支えている様子が伝わってきました。児童生徒数も増えているということですが、保護者や地域の理解、小・中から社会への切れ目のない支援が大事であると強く思いました。以上です。

【門脇（恵）委員】 大崎市の門脇でございます。角田支援学校に参加させていただきました。

説明の中で、最近小学部の在籍児童数が増えていると聞いて少しびっくりしました。小学部で入ると、みんな学校が楽しいので高等部まで進学します。さらに中学部から高等部へ入ってくる子もいて、どんどん児童生徒数が増えてくる。

これをどうすべきかと考えた時に、やはり小・中学部の段階の子供たちを地域の小・中学校で学ばせることが一番大事ではないかと思いました。そうすることで同級生としてお友達になり、地域の中でその子がいるという認識が広まります。良いところもたくさんあるので、本人も自信を持って地域の小・中学校で学び、義務教育が終わったら高等部に来るのが自然な流れではないかと思っております。

小さい頃に同級生として共にいることで、その子が存在し、自分が戻る故郷があるという状況づくりが、共に学ぶ共生社会のベース作りになっているのではないかと思っております。そのためには市町村教育委員会と協力して就学支援を充実させ、障害のある子供たちが地域の小・中学校で学べるような、地域に根ざした特別支援の対応が強く求められているのではないかという感想を持ちました。以上です。

【猪又委員】 私の方も角田支援学校を見学させていただきました。障害者雇用をしている企業側の目で、今置かれている学校の課題からどんな展開が良いのだろうと思いを巡らせてみました。

非常に広域のところからバスが何台も子供たちが通ってきているところと、建物が丁寧に使われているものの古くなってきているところに、教育現場の苦労があるのかなと感じました。子供たちが通ってくるエリアは、生活したり職場体験できる地域社会なのだろうと感じ、将来的にそこで活躍できたり、子供たちの存在を知っていただく社会資源や企業とつながっていくことが大事だと感じました。

職場体験や地域との交流を早い段階からすることで、例えばサテライト的な活動エリアを週1回や月何回か作ることで、外との関わりが開かれていく。逆に、まだ来ていない企業さんに学校を知っていただく機会を作る。学校は教育現場だけでなく、外とのつながりのコーディネートもできる場であるべきだと思います。

老朽化による建て替えは大変ですが、修繕しながらも今ある施設を上手に活かし、地域の中で本人たちが入れる場所を作りながら、親も子供も将来を見据えて一緒に考えていけるような、開放された地域との交流をやっていくことが大事だと感じました。防犯の話もありましたが、サテライトとしての社会資源を活用していくことで、周りにいる人間も子供たちを通じて成長できるような形がとても良いのかなと感じました。以上です。

【野口会長】 調査に参加されなかった委員の方々には、2つの実地調査の御説明や参加された委員の方々の御意見等を聞かれての感想、御意見など、ぜひお願いします。西澤委員、佐藤委員、門脇委員、高橋委員の順に発言をお願いします。

西澤委員からお願いできますか。

【西澤委員】 宮城県公認心理師・臨床心理士協会の西澤と申します。1番目の「学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業」に関してお話しさせていただきたいと思えます。

対人関係が苦手な人との関わりスキルが難しいお子さんというのは、診断の有無に関わらず多くて、不登校や人間関係のトラブルなどにも関わってくる部分かなと思います。ですので、こうした取組が特別な子だけでなく皆さんに行われるのは非常に良い取組だと思いますし、委員の方々のこれまでの御発言にもこれを横に広げて定着させてという御意見が多く出てきたのかなと思います。

UDLを活かした授業づくりは学校の先生方が得意とする分野かなと思いますが、ソーシャルスキル教育というところ来说うと、先生方が手法を覚えて取り組むのも良いやり方ですが、外の人と関わることで自分が良い経験になるので、外部の人を活用して行うことは良いかなと思っております。

広げていくとなった時にモデルのようにはいかないという現実もあるかと思いますが、ぜひスクールカウンセラーを御活用いただきたいなと思います。スクールカウンセラー業務の1つに心理教育ということがしっかり入っているので、業務の範囲内で活用でき、また、日常的に関わる人ではなくなおかつ子供たちのことも理解している立場ということで、先生方と一緒にやるには良いのではないかなと思いました。ぜひ巻き込んでいただけるといいなと思い、一言述べさせていただきました。以上です。

【佐藤委員】 宮城労働局の佐藤でございます。

私の方ですとどうしても卒業後の就職という観点で見えてしまうのですが、内容を聞かせていただいた中で、当事者に対しての支援ということだけでなく、周り全体で相互の理解度を進めるという内容で非常に興味深かったです。

私どもですと就職の段階で当事者だけが困っていて、受け入れ側の企業の理解が進まないという現状があるのですが、スムーズにしている事例なんかを見ると、やはり受け入れ側の同僚の方たちの理解があって一緒に取り組んでくれているというケースを聞いております。

こういった取組が広く展開されることによって、当事者も話をしやすい環境が広がり、波及効果が期待できるのではないかという風に、良い取組ではないかと聞かせていただきました。ありがとうございます。

【門脇（敏）委員】 特別支援学校長会の門脇でございます。

今日いろいろお話を聞きまして、特別支援教育は実態把握に始まって実態把握に終わるということを改めて思いました。実態把握をして子供の課題や見立てを決め、どう支援していくかが大切だということです。

「誰一人取り残さない学校づくり」のモデル事業のお話を聞きましたが、生徒に対する共有の話と、教職員に対する視点の持ち方の2方向があり、お互いに噛み合っていくとすごく良い学校になっていくのだろうなと感じます。

全ての教員が特別支援の視点を持ち、現場での支援に生かすことはなかなか難しいところもありますが、子供の実態をどう見取ってどう対応し、どういう声かけをするか。感想の中で「集団に目を向けるようになった」「声かけが多くなった」というのはまさしく実態を掴んだゆえに出てきたことだと思います。

サポートが必要な子供たちがいる中で、周りの子供たちもそれを理解して巻き込んでいくと、自然なサポートにつながっていくのではないかと感じました。

自然な形で特別な支援を必要とする子供たちへのサポートが広がっていくためには、特別な配慮を必要とする子供たちへの支援の在り方を探っていくことが重要であると思います。最終的には特別支援の視点を我々が持ちながら物事を進めていくことが、一人一人にとってプラスになり、特別支援だけでなく小中学校全体の配慮が必要な子供たちへの支援スキルが上がっていくのだと感じたところです。ぜひ全体に広がっていくといいなと思ったところです。以上でございます。

【野口会長】 どうもありがとうございました。

1つ目の報告につきましては、どう横に展開していくかが大きな課題かと思います。高校に関しては県教委の直轄ですので取組を広げていける可能性は大きいと思いますが、小中学校に関しては教育事務所や市町村の教育委員会を通してということになります。地域レベルから、誰しもうる必要な時に必要な支援を受けられるのが当たり前だということを誰もが感じていることが大事だと思いますので、ぜひその方向性で考えていただければと思います。

特別支援学校の狭隘化・老朽化という点に関してですが、熊の話も出ましたが、動物が出没するような自然豊かな場所にあることも多いので、そういった対策も考えていかなければいけないと思っています。また、新しくできた学校と古い学校とで設備面で大きな違いが出てきている状況があり、通学区によって格差が生まれてしまうのは決して良いことではないと思います。なるべく同じような環境・学びの場が提供されるような形が望ましいと思っています。

さらに、名取支援学校のように小学校に分校を持ち、玄関が共通で子供たちが関わり合い、グラウンドも一緒に使い、分校が手狭になったら小学校の教室を使わせてもらうといったことが起こっていて、そういうのが割と自然でいいなと個人的には思っています。

インクルーシブ教育システムは、子供にとって最も良い場を提供するためのオプションをたくさん用意していくのが原則的な考え方だと思いますので、そういった学びの場のオプションをどれだけ作っていけるかが非常に大事だと思います。大阪のように通常の高校にコースを設置するといった選択肢の作り方もあると思いますので、今後ぜひ御検討いただいて、子供たちにとって最も良い学びの場が選択できるような状況を作っていただければと思います。

議事については以上となりますが、皆様から何かございますでしょうか。なければ、進行を事務局にお返しいたします。円滑な議事の進行に御協力いただきましてありがとうございます。

【司会（相澤）】 野口会長、委員の皆様ありがとうございました。

続きまして、「4 報告」に入ります。第2期特別支援教育将来構想実施計画（前期）における狭隘化対策の検討状況について、事務局から報告申し上げます。

【事務局（整備計画班・佐藤）】 それでは、「第2期宮城県特別支援教育将来構想実施計画（前期）における狭隘化対策の検討状況」について、御説明させていただきます。報告資料を御覧ください。

まず1の「将来構想及び実施計画での位置づけ」についてですが、1つ目の丸が第2期将来構想における「県立知的障害特別支援学校の狭隘化対策」の位置づけとなります。2つ目の丸が将来構想と併せて策定した実施計画（前期）における「狭隘化対策」の位置づけとなります。今回報告する県南地域と仙台圏域に関する内容は該当項目を抜粋した表に記載してあるとおりです。

続きまして、2の「県南地域に関する検討内容について」御説明します。

(1) 今後の児童生徒数の推移や建物の状況についてですが、こちらは今後検討を進めていく上での基礎となる、各学校の現状等について整理したものです。充足率は国で定める特別支援学校設置基準による校舎面積の充足率を指します。

ア 角田支援学校本校：昭和57年度開校、学区は角田・丸森・大河原・柴田・村田と、白石校の高等部の学区。児童生徒数132人、充足率82%、築後40年経過。イ 角田支援学校白石校：白石中学校を一部借用して平成15年度開校、学区は白石・蔵王・七ヶ宿の小・中学部。児童生徒数22人、充足率29%。ウ 山元支援学校：昭和53年度開校、病弱障害と知的障害を併置、知的の学区は亘理・山元。児童生徒数は両障害合わせて57人、充足率170%、築後10年。エ 船岡支援学校：昭和42年度開校、肢体不自由障害対象。児童生徒数55人、充足率191%、築後50年経過となっています。

(2) 各学校の配置関係について 県南地域の南東部に知的障害を対象とする角田支援本校と山元支援学校が隣接しており、地域の中央部に肢体不自由を対象とする船岡支援学校が配置されている状況です。

(3) 審議委員からの意見について 先ほどの実地調査で頂戴した意見のうち、主な内容として3点抜粋したものです。

(4) 今後の検討の方向性について

1点目、船岡支援学校は既存の校舎・寄宿舎が築後50年を経過し、外壁塗装の剥離や躯体鉄筋の一部露出が見られるなど、施設の老朽化が進んでいることから、校舎等の改築について検討を進めたいと考えております。

2点目、角田支援学校は今後も当面の間は児童生徒数が増加していく見込みであるため、追加で教室数を確保していく必要があるところですが、既存校舎も築後40年を経過し老朽化が課題となってきたことから、狭隘化と老朽化の両面を踏まえた対応の検討が必要かと考えております。 審議委員からは通学に関する地理的制約についての御意見も頂戴しているため、この点も考慮しながら検討を進めたいと考えております。

3点目、角田支援学校白石校については、白石市において小・中学校再編の検討が進められていることから、現在校舎の一部を借用している白石中学校の今後の取扱いを含めて、白石市教育委員会とも情報共有等を図りながら、今後の対応について検討を進めたいと考えております。

4点目、山元支援学校については、各学校の配置関係等を踏まえて、県南地域における知的障害の狭隘化対策の中で、今後の在り方について検討を進めたいと考えております。

引き続き庁内関係部署や関係学校において検討作業を進め、来年度の審議会において今後の対応方針案をお示ししたいと考えております。

3の「仙台圏域に関する検討内容について」御説明します。

(1) 児童生徒数の推移や建物の状況について

ア 小松島支援学校：平成26年度開校、学区は仙台市の全行政区の一部。児童生徒数は今年度251人（昨年度272人）、充足率は64%。築後10年経過。 イ 利府支援学校：平成元年度開校、学区は仙台市宮城野区の一部・多賀城・利府・大郷と、塩釜校の中・高等部の学区。塩釜校は塩竈市第二小学校を一部借用し平成29年度開校（今年度31人）。利府本校の児童生徒数は今年度182人（昨年度228人）、充足率は89%。築後35年経過していません。

(2) 今後の検討の方向性について

小松島支援学校と利府支援学校の両校については、令和7年度の松陵支援学校の独立・本校化と、利府支援学校富谷校の松陵支援学校への付け替えにより、昨年度より児童生徒数が減少したところです。しかしながら、今後の全体的な知的障害の児童生徒数の増加傾向に伴い、在籍数が再び増加に転じるものと考えられることから、引き続き児童生徒数の推移を注視しながら、狭隘化対策の検討を進めていきたいと考えております。

なお、狭隘化対策の検討に当たっては、現在庁内で策定作業が進められている「県立高校将来構想」の計画内容等を踏まえて、県立高校を所管する関係部署等とも連携の上、余裕教室等の活用についても引き続き検討を進めていきたいと考えております。

4の「今後のスケジュール」について

1点目、検討の方向性に基づき、庁内関係部署と関係学校において検討作業を継続してまいります。2点目、来年度ですが、具体的な対策を取りまとめて、将来構想審議会にて対応方針案を御説明した上で、審議会での御意見等を踏まえて内容を調整し、最終的に実施計画の改定まで進めていければと考えております。

県南地域と仙台圏域では検討の状況が異なるため、それぞれの進捗状況等に応じて実施計画の改定を検討していきたいと考えております。事務局からは以上でございます。

【司会（相澤）】 ただいまの報告につきまして、御質問等ございますでしょうか。

5 その他といたしまして、令和8年度県立特別支援学校高等部・高等学園入学者選考について、事務局からお願いします。

【事務局（教育指導班・刈敷）】 令和8年度県立特別支援学校高等部(知的障害)・高等学園入学者選考について御説明申し上げます。その他と書かれている資料になります。

昨年度までの状況と課題についてですが、昨年度までは高等学園と地域の特別支援学校高等部の1次選考を同日に実施しており、高等学園を不合格になった場合、地域の支援学校が2次募集を行うかどうか不確定であったことから、受験を躊躇する傾向が見られました。その結果、本来は高等学園を希望する軽度の生徒が地域の支援学校へ流れ、入学後のミスマッチや高等学園の定員割れが生じる課題がございました。

このため、今年度は高等学園等の選考を前倒しとすることで、高等部との併願を可能にするようスケジュールを変更して実施いたしました。

成果としましては、受験生は高等学園を不合格になっても地域の支援学校を受験できるという安心感を持って挑戦できるようになった結果、高等学園等の定員はほぼ充足し、混乱もなくスムーズに実施することができました。

一方で課題としましては、今年度初めてオンラインでの入試事務説明会を実施しましたが、直前の申し込みも多く、周知方法に工夫の余地があります。今後も引き続き、各中学校や特別支援学校に対し、新しい手続きや日程についてより丁寧かつ十分な周知を図ってまいりたいと考えております。事務局からは以上でございます。

【司会（相澤）】 この件について、何か御質問等ございますでしょうか。

次回の予定についてお知らせいたします。次回の審議会は、年度替わりまして令和8年6月上旬頃を考えております。日程等につきましては改めて御連絡させていただきますので、よろしく願いいたします。

以上をもちまして、令和7年度第2回宮城県特別支援教育将来構想審議会の一切を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。